アバズレばっかでもう死にそう

杜甫くれす

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自由に生きて良いって言ったけど、此処までやれとは言ってないよ。

オレはこの先生きのこる事が出来るのだろうか。

フリーダムに目覚めたバーサク艦と、胃薬携帯の指揮官と、ギリギリ常識人達の織りなす混沌と感動（？）の鎮守府エブリデイ。

同作者の「アバーズレーン」とはあんまり関係ないのでご了承下さい。

目　次

おクスリキメときますね ―――― 1
オレ（の主砲）じゃお前（の胃）は救えない ―――― 11

おクスリキメときますね

「ようこそ。こんな所を見に来るとはアンタも変人だな」
「指揮官、誰に喋っているんだ？」
　誰って言うなら、まあ客人だな。
　流れでスムーズに紹介なんて柄でもないので手早く済ませよう。指揮官、歳は２０過ぎ、身長体重ともに平均的で健康。顔は悪くないが良いかと言われてもオレには判別がつかない。
　さて、オレは平常運転で書類に追われていた。運動不足になりかねない程度には溜まる書類作業は嫌いな仕事であり、同時にオレに出来る最大の仕事という悲しいジレンマ。辛いご時世だ。
「まあそれより、何の話だっけ。確か長門ちゃん採用の重桜艦隊の話？」
「そこまで正確に覚えているなら私に聞くまでもないだろう」
　まあ恒例行事だ、分かってないヤツ（読者）も居ることだし。
　さっきからオレの奇行に置いてけぼりを食らっている銀髪の彼女がエンタープライズ。ここでも付き合いが一番長くて、恐らく一番強くて、オレが最後に頼る命綱になるユニオンのヨークタウン型航空母艦のセカンド。
　長く美しい銀髪のストレートロングと紫水晶の瞳が眩しい美女とも言う。チェスターコートから露出の少なくない格好は厭らしくないどころか可愛らしくも有る辺り、センスも頼りになるのかもしれない。
「今日の艦隊戦では、一航戦を採用することで今までとは別次元の殲滅力を見せたようだ。ミス三笠のタイプでは戦艦を優先して採用してしまうからな、其処の違いが大きいのかもしれない」
　さて、では三笠と長門の違いをざっくりと説明しよう。
　三笠は軍神とも呼ばれる重桜戦艦で、重桜そのものを牽引するリーダー格だ。彼女の特徴として、重桜艦隊の戦闘力を底上げする旗艦としての能力が有る。
　以前はコレに頼って重桜の攻めの強さを活かした押して押し倒す

戦法をやっていたのだが、長門が来てから少しばかり事情が変わった。
長門も三笠と同じ重桜艦隊の底上げができる戦艦なのだが、三笠は特に僚艦を戦艦にすることでより強い力を発揮するタイプだ。
長門は空母を強化する。更に言うなら三笠に比べると当人の性能も低くない、まあ三笠が旧型すぎる故の弱点だな。
という訳でオレ達はこの二隻の性能を比べて採用パターンについて考えていたというわけだ。
「一航戦が強化されるのは強みだな。長門ちゃん自身も単体で強みが有る、やはりこっちに軍配が挙がるか……」
オレの総評に軍帽を被り直したエンタープライズが異を唱える。
「確かに数の多い艦隊戦ではそれが事実だが、ミス三笠は少数精鋭に強い。一概にこちらとは言えないだろう」
「まあそうか。なら、海域の敵数を見て切り替える方針にしよう」
「そうするべきだろうな」
案件終わり。まとめを書き記して次に移る。
――待てよ。
「ちょっと待て」
「どうした、指揮官？」
「じゃあ一航戦――――赤城は？」
「報告を聞いたのは先程というわけでもない。もうすぐ帰って――――」
扉がバタァンと明らかに傷む音を立てて開くのと同時に机の下に緊急避難した。
件の女の弾む声が木霊する。
「指揮官様！　第一艦隊僚艦の赤城、只今帰投致しました!?」
「……」
エンタープライズは目線も合わせず後ろでＯＫサインを出してくれた。有り難い、オレも命は惜しい。
赤城はエンタープライズの顔でも見たのだろうか、ムッと明らかに不機嫌そうな声を出すとツカツカと迫ってくる。

「……エンタープライズ。指揮官様はどこかしら？」
「さあな。何時も通りサボって消えてしまったよ、私も書類が溜まってててんてこ舞いだ」
　赤城がすかさず鼻を鳴らす。
「嘘おっしゃい、私が指揮官様の匂いも分からない女だとでも？」
　すぐにエンタープライズのジェスチャーが
『勘弁してくれ、流石に彼女の尋問には耐えられない』
　とかなり切羽詰った様子で嘆願するので仕方なく顔を出す。
　赤城はパアっと花でも咲いたように顔を輝かせるが、オレは其れを見て更にげんなりする。そりゃそうだ、これから嵐に飛び込むわけなんだから。
「指揮官様!?　赤城の活躍、お聞きになりましたか!?」
「ああー、うん。赤城というか第一艦隊の戦績は聞いたぞ。無事で何よりだ」
　そんなお言葉勿体無いですわ、だとか抜かして両肩を抱いて身を捩らせる赤城。昼間から飛ばすよなあ、コイツ。
「無事なのは当然の事、本当ならば無傷完勝で指揮官様の正妻として恥じぬ働きを――――」
「いや正妻ではないよねアンタ」
「そう恥ずかしがらなくても構いませんのに……でもそういう所も好き……」
　あー、えっと。説明できるところはない。コレはこういう存在だ、オレの中でとうに生物的な概念に当てはめていない。天災の類だ。
　赤城。重桜航空戦隊が「一航戦」の片翼。彼女は立ち位置で言えば姉に当たる。
　黒い羽織や艶やかで長い黒髪のせいで真っ黒な印象を持ちやすいが、個人的には赤色の瞳が一番恐ろしい。何を考えているか分からんというか、底が知れないというか。
　服装はミニスカートに胸元の開いたインナーとどうしても目のやり場に困る、オレには幾ら見られても平気だというがそういう問題ではだな……。

狐のような耳と尻尾を盛んに揺らして目を見つめてくる。
「ところで指揮官様、どうしてお隠れになっていたのですか？」
「えっ、あいやそれはだな」
不味い。赤城の笑い方が危ない方向に走ってる。
予想通り、元より昏い瞳が更に帳を下ろしていく。
「いえ指揮官様がまさか私からお逃げになるなどとそれ程赤城も殿方を疑って掛かるような女ではありませんわですがだというなら誰かに脅されているというのが必定であるわけで状況証拠としてはエンタープライズ――――――この女しか、居ませんよね？」
「えーあー、その。エンタープライズちゃん、ガンバ」
「指揮官!?」
百面相よろしくに怒気を放った笑顔でエンタープライズに詰め寄っていく。眉一つ動かさずに戦火の中に活路を見出してきたその薄紫の瞳が恐怖に揺れている。
赤城はそれ程なのだ。
「どういうつもりかしら、私から指揮官様を奪おうだなんて」
「ま、待て赤城。私は別に奪おうなどとは」
「ではどういうつもりなのかしら、説明してくださ――――――ハッ！」
なにかに気づいたように目を見開く赤城。こりゃあ相当面倒なモードに入ったな。
少し俯いて呪詛じみた勢いで何かを呟いた後、息の掛かる距離までエンタープライズに詰め寄る。
「お前――――――ッ！　まさか指揮官様を脅してあんな事やそんな事をしようとしていたのかしら!?」
「はぁ!?　真面目に何を言っているのか分からないぞ赤城！　やはり私にはあなたが手に負えない！」
「オレにだって手に負えないからな？」
まるでオレなら多少制御ができてるみたいな。オレもさっぱり出来てないから。
早くも絶望と狂気の渦に飲まれたオレ達の会話はスルスルと明後

日の方向に漂流していく。今どきロビンソン・クルーソーだってここまで漂流しない。
「だってそうとしか思えないわい!?　指揮官様を匿ってお前に何の得があるのかしら、無いでしょう!?」
「私がやらせた訳ではない方向性では考えられないのか赤城!?」
「考えられないわ！　指揮官様が私を拒否するなんて――――――ねえ？　指揮官様？」
何処か濁った瞳がオレに同意を強要する。
本能のままに首だけをコクコクと動かした。
「じゃあお前がやらせた以外に何か可能性があるかしら!?」
「うーんもう良い分かった私が悪いんだな!!!」
エンタープライズがとうとう投げてしまった。でもオレだって赤城に逆らえるほど強靭な精神は持ち合わせないからな、許してくれ。
赤城が詰め寄るのにエンタープライズは為されるがままだ。この死んだ表情の少女の何処にグレイゴーストなどという異名を付けられるだろう、いや一応死んでるからゴーストか。
オレにはどうすることも出来ないことが悟れてしまったので、取り敢えず殴られウサギみたいになってるエンタープライズを放置して次の書類をチェックする。
「デザートの在庫が足りないか……しゃあねえ、自費だな――――」
溜息を吐いた直後に真上から妙な音と埃が落ちてくる。
「杏仁豆腐を買ってくれるだって!?　観察してる場合じゃねえ！」
「あの――――加賀さん？　何で天井裏から登場してるんだ？」
フフフフ、と気色悪い笑い声と共に板をぶち抜いて加賀がご登場。白いボブカットのやべーやつ。
さっき紹介した一航戦のもう片翼。妹、戦闘狂、見ての通り馬鹿。姉譲りのスタイルと服装には色々と文句を言うべき所であるが、まあ赤城よりはずっと話が通じるせいかそこまで咎めようという気が起きない。
加賀が頭だけを見せたまま会話を続けようとする。

「それで具体的には」
「分かった、話はしてやるからそんな埃っぽいところから出てきなさい。咳が出るぞ」
「心配性なやつめ……よいしょっ、と」
スムーズに天井からぶら下がってアクロバティック着地を決める加賀。ところでよいしょ、とかつい言っちゃうの若干可愛いな。
ちゃんとオレから距離を取って服をはたくと、続いて尻尾をはたき始めた辺りからコッチをジーっと見つめてくる。早く話せとな、せっかちな空母はモテないぞ。
「まあ今はアイスの人気が偏ってる。そっちが何とかなったら杏仁豆腐も増やしておこうか？」
「是非ッ！　お願い申し上げるッ！」
キャラが保てていない、どれだけ杏仁豆腐が好きなんだ。いや食嗜好にガタガタ言うつもりはないけど……。
鼻息荒くオレに尻尾をバシバシ当ててくる加賀。手を握るな作業ができん。
「分かった、分かった！　やるだけやってみるから手と尻尾を退けてくれ！　作業が出来ないだろうが!?」
「いや、それは良いが――――姉さまは止めないのか？」
「お前逆に聞くけどオレに赤城が止められると？」
「思わないな」
「だろ？」
ちらりと横を見ると、相変わらず赤城に胸ぐらを掴まれたエンタープライズがボロ布みたいに振り回されている。アイツ段々気分悪くなってきてるみたいだな、可哀想に。顔が青い。
加賀と一緒に安らかな眠り（気絶）を願って手を合わせていると、扉が開くと同時に消耗しきった荒い息が聞こえてくる。
「はぁ……はぁ……やはり此処であったか」
「ああ、長門か。そう言えば置いてきていた」
「長門ちゃん可哀想すぎる」
仮にも旗艦だぞあの娘。お前らには敬意とか規律とか無いのかよ。

息を整えながら歩いてくる長門に加賀が肩を貸してやる。何故その優しさを最初から見せられないのか、コレガワカラナイ。
ようやくと言った体でオレの前に立った長門は、据わった目ではっきりと
「もうやだ。余出撃しない、やだ」
オレに吐き捨てた。もうゴメンとしか。
席から立って頭を撫でてやる、労いとしては不十分だがコレぐらいしか出来ないからな。
「ゴメンな、大人がバカだと付き合わされる方は大変だもんな……ッ！」
「指揮官、妙に力が籠もっているが心当たりでも有ったか？」
まあ昔に色々有ってな。
目頭を熱くしていると長門は男泣き手前のオレに申し訳なくなってきたのだろう、シュンとしてしまった。
「す、すまぬ。我儘であったな……」
「子供が遠慮すんなよ長門ちゃん！　良いんだよ、君は真っ当な権利を行使してるだけだ！　オレも赤城と出撃とか絶対イヤだからな！」
「指揮官様ぁ？」
あ、死ぬわ。
――いや、違った。赤城まで佇まいに力が無くなってしまう。
「あーあ、指揮官が姉さまいーじめた～」
「お前なぁ……いや、赤城？　これはだな」
「いえ……人には好き嫌いがありますもの、強要など出来るものではありません。夫婦（めおと）とて例外ではない、仕方ないことです」
「夫婦じゃねえ」
というかさっきオレに同調を強要していたような。多分今言ったら駄目か？　コレ。
さっきまで死んだ顔だったエンタープライズが生気のない赤城の手を握る。
「……何ですか、慰めのつもり？」
「違う、私は一応赤城のことを応援しているのだぞ？」

いや応援しないで欲しい。やっぱりコレも言ったら駄目なんだろうな……。
「指揮官は私のものだが、共有するのは悪くない」
「は？　アイツもイカれてんのかよ、此処はぶっ飛んでんな～……長門ちゃん!?　一緒に駆け落ちしてくれ!?」
「え!?　ええ、余にも心の準備というものがだな……いや、拒否しようというのではないのだぞ？」
オレに安寧の地などなかったらしい。逃げよう、今すぐ。
何時も通りの何ら狂気を感じない爽やかな笑顔のままエンタープライズが続ける。
「あなたは私の背負うものを分かち合ってくれる人だ……そう易々と逃さない」
「うーん何を言ってるのかオレにはちょっと」
何というか、狂ってると言うより何かの前提がズレてるみたいだな。何で冷静なんだオレ。
黙っていなかったのは赤城だった。再び胸ぐらを掴んで敵意むき出しの笑顔で睨めつける。
「随分大きく出てくれるわねえ、グレイゴーストォ！」
「ははっ、別に独占しようという訳ではないじゃないか。私は赤城の恋路を邪魔するつもりはない」
「意味不明ですよ！　お前にとって指揮官様は何なのよ!?」
凄いな、赤城に意味不明と言わしめたか。もうどんなやつにも理解不能だな。
「くどいぞ!!　誰を愛そうがどれ程汚れようが構うものか、最後にこのエンタープライズの横にいれば良いだけのこと!!」
「たった今お前の横に立ってやろうという気は失せた」
「そ、そんな!?」
そこに私はいません。きっとお前の横にいることはない。
よろよろと力ない歩みでオレの所まで来たかと思うと、執務服の袖をきゅっと引っ張っておろおろと倒れ伏す。
「捨てないでくれ……私には指揮官の命令しか無いんだ……

私の命はあなたのもの、この力も四肢も心だってそうだ。要らないというのなら何処かへ捨ててくれ……捨ててくれ……」
「オレ無しで生きていってくれ「無理だ、耐えられないッ!!!!」即答かよ!?」
ただもうちょっと質の良い男を見つけることをオススメするし、後その調子では一生彼氏の一人も出来ないぞお前。
仕事してる時は普通なんだがなあ……何故か時々こうなってしまう。勿体無い逸材だ。
――――パシャリ！
シャッター音。開きっぱなしの扉の向こうに視線を寄せる。
「撮れた！　これは界隈で売れるよ！」
グリッドレイだ。クソ写真家、うちでもトラブルのもとだ。
「指揮官として一航戦に命じる――――あのカメラを叩き割れ。今すぐに！」
号令と共に乱れた流れが凍りつき、少しの間の後にまた整然と流れ出す。
「了解致しましたわ～――――踊りなさい、雑兵」
「――――何秒遊べるか、見ものだなぁッ！」
「ひぃっ!?　絶対渡さないからね！」
凄まじい勢いで走って逃げていくグリッドレイ。
馬鹿め、一航戦から逃げられるなど思い上がったか。
「加賀、分かっているわね!?」
「――――現像ですね姉さま！　指揮官ドアップで！」
「本人の前でくらいそういう発言を自重してくれ!?」
オレの痛烈な叫びなど何のその、およそ人型では見られないであろう車両じみた速度の二人が残像を残して消えていく。
「……指揮官というのは大変な職務だな。大儀であるぞ、余が褒めてやろう」
「有難う長門ちゃん、今日も頑張れる」
「指揮官!?　何だ、何が駄目なんだ!?　何だって治す、だから――――ッ！」

「別に何も求めてないから……」
敢えて言うならオレをさっさと諦めてくれると有り難いかな。
胃が痛い。ポケットから胃薬を取り出した、何でオレはこんなものを携帯しなくちゃならないんだろうな……。

オレ（の主砲）じゃお前（の胃）は救えない

「それで指揮官、今日の仕事に戻ろうか」
「あ、ああはい。そうだな」
丸々カットは惜しいぐらいにオレとエンタープライズの支離滅裂な押し問答が有ったが無事カットになります。
さて。帰ってきた赤城がカマをかけたら現像した疑いが有ったり、加賀がローリングしながら頭撫でろと叫んできた狂気の後。オレはあの二人をエンタープライズに簀巻きにしてもらった後から仕事に戻っていた。
「さて――――――おいおい、また来客か」
言った側から扉が開く。ノックしないか、何だか誰もかれもがノックもせずに入ってくるんだが。
映るのはブロンドのポニーテールと少し暗い鮮血色の瞳。妙に開いた胸元がまた目線に困らせてくるが――――――当人ときたらオレに不機嫌そうに鼻を鳴らしていた。
「悪かったな、「また」来客だ」
「ああ、ジャンバーちゃんだ」
「服の名前みたいに呼ぶな」
さて。ジャンバー改めジャン・バール。ヴィシア聖座最後の戦艦、素っ気ない娘だ。
だが実のところ優しいし繊細らしく、オレでは扱いかねる……という意味合いがコレ（赤城）とかコレ（加賀）とは違うタイプだ。オレは思春期女子高生とかやさぐれ女子とかの扱いは飛び抜けて下手なのだ、なんせ女性経験がなさすぎる。
オレに呆れながら部屋に入ってくるが、引っ張ってる縄が気になって仕方ない。何かズルズル～って音と妙な呻き声聞こえるし。気になるというかもう事案ではなかろうか。
「えーとだな、何か予想ついたけど要件から聞いて良いか？」
「ああ？　まあ構わんが……」
ジャン・バールが思い切り縄を引っ張ると、ドスリとそれは客用の

ソファに投げ込まれた。
――――――――いや。敢えて聞いたほうが良いんだろうなコレ。
しばらくは光景に息を呑んでいたが、先手を取ったエンタープライズが笑顔を引き攣らせて尋ねる。
「ジャ、ジャン・バール？　何故サン・ルイを簀巻きにしているのだ？」
そう。

ジャン・バールが引きずっていたのは簀巻きにしたサン・ルイだった。
くぐもった声でサン・ルイが何かをコッチに訴えかける。涙目とかじゃないし瞳から反抗心が見える辺りコッチも中々なものだ。
「んー！　んー!?」
「いや。コイツを波止場に吊るすか、塩漬けにするかを聞きに来た」
「どっちも駄目だぞ!?」
選択肢がおっかなすぎるだろ。海賊的発想というか、まるで罪人の扱いである。
お前は何なんだ、と言わんばかりの顔で頭を掻かれる。
「と言ってもオレもそこまでするつもりはない……一部から波止場に吊るせ、塩漬けにしろだのと激しい非難が飛んでくるもんでな。一応聞きに来たってわけだ」
「この簀巻き女は何したんだよ」
思い出すだけで疲れる、と言わんばかりに虚空を見つめて目を虚ろにするジャン・バール。
少し待っていると漸く重い口が開く。
「食堂で頼まれたからあげ全てに無差別にレモンをかけたくった」
「罪重いな、吊るしとけ」
「指揮官!?　落ち着け、そこまでのことかそれは!?」
そりゃそうだろ。
多くの自由が許容されたこの環境でなくとも許されるはずの「食の

自由」を奪った、ってのはとても駄目なことだと個人的には思うね。こういう行為を簡単に許すのはオレ達の暗黙のルール内の裁定として不味い。
一応どれだけフリーダムだろうがそこに規律は存在している。オレ達の場合は「自由を侵さない事」だ。
エンタープライズが察したように一歩退く。
「何となくだが理解した、だが吊るすのは駄目だと思うぞ」
「――――そりゃそうか。ちょっと冷静さを欠いたな」
ちょっとどころじゃない？　細かいことは置いておけ。
ジャン・バールまでオレを見て引きつった顔になる。
「お、お前は時々オレがゾッとするような顔をするな……張り合いがあるのは結構だが」
「そんなえげつない顔してたかな、オレ」
「人殺しの顔だったな、具体的には名前書く時の夜〇月」
ううむ、それは良くないな。女相手にそんな目つきで喋るのは良くない、うん。っていうか相当悪人面じゃないのかオレ。
ショッキングな事実も今はルワンダに投げ捨てて。取り敢えず弁明を聞くためにサン・ルイの口に貼っ付けられたガムテープを引っ剥がす。
「痛っ！　指揮官。その、もう少し優しく……してくれ」
「頬を染めるな気色悪い。命乞いは聞いてやろうと思ったが辞めだ、吊るせ」
「了解。オレも気の毒には思うがコイツの命令は一応聞くのが筋だ、恨むなよ」
引っ張り上げようとするジャン・バールを見て慌てふためいたサン・ルイがオレに向かって首だけで謝罪を始める。
「わ、悪かった！　私が悪かったから捨て台詞ぐらいは吐かせてくれ！　発したセリフが呻き声とこれだけだなんて流石に堪えられない！」
まあそりゃそうだ。オレも紹介はな～んにもしてないし、ミリしら勢からしたら「レモンテロを仕掛けた謎の女」だけだもんな。

では紹介を。彼女は灰の髪が特徴のアイリスの「開発艦」の一隻、サン・ルイだ。開発艦とはイコール未成艦と繋げてもらって構わない、要するにサン・ルイにはカンレキが無いということだな。
恐らく此処以外で作られ実戦に出されている彼女は公平中立を重んじ、義を愛し、神を信じるさぞ敬虔な戦乙女と言った様子なのだろうと思う。
――――え？　「じゃあ此処では」だって？　勿論イかれてる。
「さて、罪人。謳うべき方便は有るかね」
「私は私の『正義』に従ったのみのこと！　何ら罪に問われる事など無いッ！」
な、かなりイかれてる。エンタープライズが呆れた溜息。オレは溜息を出す気力もない。日に日に痩せてる気すらする。
「押し付けがましい正義など偽善にも満たないぞ、それではただの抑圧だ」
「グゥッ！　隠れイカレ女のエンタープライズに言われると私もダメージが入るぞ……」
「隠れイカレ女ってなんだよ、あんまり隠せてねえよ」
お前らの隠れるはまさしく「頭隠して尻隠さず」の典型だからな。
とはいえ基本はエンタープライズはオレの味方である。正義の味方でも悪の敵でもなく、オレの味方というスタンスらしい。
忠臣と呼ぶのが相応しいのだろうが、同年代の女性に大して忠臣というのもアレだな。親友？　いや、違うな……。
「何をブツブツ言っている、コレをどうするとオレは聞いているんだが」
「やっぱり仲間……あ!?　すまん、考え込んでいた」
「やはり指揮官も時々おかしいというか、変わり者だとサン・ルイはふと思う」
どうにも要らないことに気が散るくせが治らない。本題から逸れるほど集中力が上がる辺りが困りものである。
――確かにオレも変わり者と言えば変わり者なのだ。いや察しろよ、この環境で胃薬程度で生きていけるとか凄くないか、普通は精神

安定剤だと思う。
　と言っても指揮官の適正の正体は公表されていないものの、変人が多いというのは聞き及んでいる。他所では指輪のダミーを三桁作ったり、いきなり飯作ったり、秘書艦相手に告白してギャンブルで不戦勝キメるやつとか居るらしい。オレは多分マシな方だな。
「まあ、波止場に吊るしても良いだろ。死にはせん」
「お前がそう言うならば仕方ない……さあ来い、サン・ルイ――――塩でカピカピになる前には開放してやる」
「嫌だ！　嫌だ！　私はそこまでの事はしていない！」
　喧しい奴め。
　オレも引っ張り回してやろうかと思い始めた頃に机の下からボソボソと声が聞こえてくる。
「破壊と混沌の鉄血空母、グラーフ・ツェッペリン。特に理由はないが卿の足下より参上した」
「何でこの部屋はこんな構造が改造されてるんだ」
　護身用のピコピコハンマーを引き出しから取り出して頭を思いっきり叩く。
　ツェッペリンが頭を抑えて目に涙を溜める。
「痛い!?　何だ、まだ何もしていないではないか！」
「敢えて言うなら存在しているのが悪い」
「理不尽だ――――痛、痛い！　辞めろ、痛――――痛いから辞めて……」
「いやこのタイミングを図って登場したであろうお前に苛立ちが隠せなかった。やり過ぎてすまん」
　めっちゃシバいてしまった。傍から見るとオレはいきなり机の下にピコピコハンマーを真顔で叩きつける変なお兄さんだ、しかもピコピコ鳴るからシュール極まりない。
　仕方なく退いてやると、涙目で頭を両手で覆うツェッペリンが机から出てくる。サイズ感すげえな……いや身長の話だぞ。おい、アンタに言ってるんだ。
　オレよりも明らかに背の高いグラマラスな美女がオレを弱々しげ

に睨みながら頭を抑えている絵面がシュールでしかない。
「で、用事は何」
「卿は我を粗末に扱うな……特に何もないと痛ぁ!?」
あ、コレなんか楽しいな。うーん、変な所に足を踏み入れる前に辞めておこう。
ピコピコハンマーをしまって手を後ろに回す。何だろうな、しっかり自制しないとまた何かしてしまいそう。
「エンタープライズ、指揮官が我をイジメるのだが!?」
「そんな今に限って被害者面されても指揮官も困るだろう、普段が普段故な」
「ド正論で我を圧死させる気なのか!?」
そうだぞ、今でこそよわよわ年上ムーブをしているがいつ這い寄る混沌に戻ることやら。
「大体加害者には何をしても構わないという考えは横暴だ！　被害者がその損失を補償されるならば加害者はその罪の清算による贖罪を保証されて然るべきだ！」
「ツェッペリン、難しい。ジャン・バールが目をグルグルさせてるから一言で」
「贖えば罪はノーカンだ!!!!!」
「まだ漢字が無駄に難しい!!」
「知るかッ！　我の語彙センスに文句でも!?」
文句しかねえな、なんだろう。自分でも理不尽なこと言ってるってのは分かるんだけど、まあツェッペリンだし……。
ジャン・バールがいつも通りのすまし顔に戻っている。あの娘は何かポンコツ臭いんだよな……いや、追求しようとは思わないが。
サン・ルイも「なるほど」とか言ってる、お前もかよ。
「では指揮官、私は一体何処に罰で帳消しにする罪が有るのだ！　正義だぞ!?　無敵だぞ!?」
「お前が言ってる正義は振りかざす暴力と一緒じゃねえかな、うん」
何だよ正義は無敵って。お前の正義おかしいよ、未来に生きてんな。

そもさん天上天下遍く思想というやつは一方の正義でまた一方の不義なので無敵の正義なんてのは全くまやかしでだな……とかそういう話はまた今度にするとしようか。

「痛いぞ……アレは我に対して加減がないな全く」
頭を擦ったツェッペリンが複雑な顔つきでぼやく。結局サン・ルイを取り敢えずベッドに投げ込む帰り道、指揮官が『ツェッペリンを見張ってて欲しい』とエンタープライズに頼んだまでは良かった。
だがツェッペリンが「破壊と混沌は足で探すものだ」等と訳のわからないことを言い出してジャン・バールについてきて――――そして現状である。
前を歩いていたジャン・バールは当たり前だ、と言わんばかりに呆れたように眉をひそめる。
「いつもいつも馬鹿なことばかりしているからそういう扱いになる、赤城や加賀と同類の扱いってことだ」
「だがピコピコハンマーで能面のような顔のままバカスカ叩かれるのはな！　痛いのだ……ッ！　何というか、心がだな!?」
誰だって真顔のままピコピコハンマーで釘でも打つようにバカスカ殴られていたら嫌になる。エンタープライズも思わず同情した。
「まあ、とはいえ敢えてやられ役に回っているようにも見えなくはないがな」
「む。やはり看破されてしまうか」
「は？　ツェッペリンはドMって認識で良いのかよそれ」
「誰がドMだ！　被虐趣味と言い改めよ！」
ジャン・バールもドン引きである。エンタープライズは「またか」と言わんばかりに目を覆って今後を憂うばかりで言葉も発さない。
とはいえ最初期から指揮官の下に居たエンタープライズから見れば、専ら「キャラ付け」の類の言動なのは明白だ。破壊衝動の強いツェッペリンは敢えて言うなら加虐趣味に近い。

聞く度に妙な刷り込みをするものだと首を傾げていたものだが、ふとエンタープライズは思いついたように尋ねる。
「そう言えばツェッペリン、貴方のその妙なキャラ付けは何故始めたんだ？　正直無理がある」
「随分ざっくりと言ってくれるではないか……」
ヘコんだように帽子を被り直すツェッペリン。
「何だ、ぶっちゃけ話と言うならアレの精神安定のためだな。被害者の立ち回りが多すぎると捌け口が足りないだろう？」
「まあそんなことだとは思ったが」
「いや待て、オレはもうちょっと真っ当な方法でストレス発散させてやるべきだと思うんだが」
常識とオツムの緩い此処でそんな真っ当なツッコミ、むしろ古参から気味悪げに見られるだけである。
――とかいうのはではなく。ツェッペリンは真剣な顔つきで窘める。
「ジャン・バール。向き不向きというものはやはり有る、アレにマトモな発散方法など適さないのだ」
「そりゃあこの環境だとなあ？」
「それを作ったのもアレの自由意志だ。決して元よりこんなイカレ――――――ネジの飛んだ面子ばかりだったわけでもない。いや一航戦は知らないが」
「言い直せてないぞ、ツェッペリン。否定は出来ないのだが」
エンタープライズはツェッペリンの語彙チョイスにやはり不安を覚えつつも補足を入れる。
「まあ、彼もこれを望んでいるフシが有ってだな」
「頭湧いてんのかアイツ」
「いや一応まっとうな理由がある、待て。ブランダーバスを取り出すな」
流石にそんな上官、「問答無用！」とか叫ばれながら銃殺されてもやむ無しでは有る。
怪訝な顔で弁明を待つジャン・バールに一抹の危機感をいだきつつ

もエンタープライズは宥めにかかる。
「彼はどうやら抑制された艦――――十把一絡げに言ってしまうと、「軍人気質な指揮官」を多く見たようでな。そこの艦が不憫でならなかったそうだ」
「言いたいことは分かるが、これはフリーダムに過ぎるぞ」
「だが望んでいることに正しく『応える』のが私達の性質だ。それは貴方だって知っているはず」
言い返せない、と言わんばかりにジャン・バールが言葉に詰まらせる。
たしかに事実だろう。演習で見ることになる艦には勿論同型艦も居るし、何なら此処に居る艦と同じ者も居るが中身で言えば多種多様だ。大筋は同じようだが、何か根本的に艦隊ごとに決まった空気感の中で言動が構成されているのはジャン・バールもよく知る話だ。
結局の所、艦は『指揮官が望む在り様』で存在するものなのだ。
難しいことを考え始めたからか、混乱したジャン・バールはブランダーバスのトリガーに手をかける。
「倫理学で言うところのペルソナみたいなものだ、深く考えるな。そして銃を置け」
ツェッペリンの真っ当な指摘に頭を掻きながらジャン・バールはブランダーバスを下げる。
それを見届けた後ににっこりと頷くエンタープライズに、ツェッペリンが妙な顔をする。
「だからこそエンタープライズ、貴様が妙なのだ」
サン・ルイもジャン・バールに引きずられながら頷く。
「全くだな、何故そうマトモなのやら――――いや辛うじてマトモの間違いだな」
「なあツェッペリン、やはり彼女を波止場に吊るそう。私も賛成だ」
「Ｇｕｔ（良い）．　よし、吊るそうではないか」
「オレは却下だからな」
藻掻くサン・ルイをぐいと引っ張って鎮める。
エンタープライズは冗談だと言わんばかりに手を振りつつ、質問の

返答を考え始めた。
「まあマトモかと言われれば「まだマシ」だな、恐らく出会った時期の問題だろうか」
「我も割と最初だが」
「いや、特に最初の十隻――――――一番、余裕がなかった時期だ」
エンタープライズも表情を曇らせる。この話題は御法度のたぐいなのだ。
今でこそかなり強力且つ大規模な鎮守府となり、艦も負傷や疲労を考慮したローテーションを構成できる程に成長した。
だが発展の影には発展までの犠牲が有る。特にエンタープライズや他何隻かが経験した「影」は、現状からは想像できないもの。そして特に暗い影を落とす、もしくは影そのもの。
何とは言わず、誰も触れないものだ。
「成る程、その頃のイメージが強い故にマトモなのか」
「いやそうでもない」
「違うの!?――――――しまった、素が出たではないか」
例外はつきものだぞ、とツェッペリンを愉快そうに眺める。
頭を抱えたジャン・バールが結論を急ぐ。
「結局なんでお前はマトモなんだ」
「多分ケッコン候補だからだろう」
「マジかよ、オレの上官様は眼が腐ってるらしい」
呆れて声も出ない、と肩を竦めながらまた歩き始めるジャン・バール。
エンタープライズは
「元よりマトモではないだろうさ」
とからりと笑って答えた。